本多の森の復讐鬼

石川県怪異譚

奥　和也

――復讐に、声はない――

金沢　卯辰山

むかし、金沢の本多の森の深奥に、木々が鬱蒼と立ち並んで月明かりさえ地面に届かぬような場所があった。そのほとりに、一人の老いた男が妻とともに質素な小屋を構えて暮らしていた。小屋のすぐそばには、犀川へと続く澄み渡った小川が流れていた。

老人は物静かな性分で、ほとんど口を開かず、その一挙一動には不思議な静寂がにじんでおり、近隣の者たちはときに薄気味悪さを感じることもあった。誰も彼がどこから来たのかを知らなかった。能登の最果ての山々か、あるいはさらに遠い異国の地から旅してきた者だと、こそこそ囁く者もいた。

一　罪業

その冬、ひとつの狡猾な森の獣が金沢の城下に現れた。並外れた知恵と邪悪さを持つ、人を化かす異形の生き物（キツネ）であった。獣は老いた妻に向かって蜜のような言葉を語りかけ、戸室山から吹き下ろす吹雪が荒れ狂っているからと、家の中への入室を乞うた。

初雪のように純粋な心を持つ優しい老婆は、扉を開けた。しかし獣が足を踏み入れるや否や、その本性を剥き出しにした。残忍な奸計をもって無抵抗の老婆を圧倒し、カラスたちが天空から逃げ去るほどに忌まわしい蛮行を犯した。

獣は死んだ老婆の身を切り刻み、その肉から煮込み料理を拵えた。夕暮れ時に老人が帰宅すると、獣は偽りの愛想よさで迎えた。「旦那さま、奥方さまはご近所へ出かけられました。この食事をこしらえるよう頼まれましたので」

老人は黙って食した。最後のひと匙を口へ運んだとき、床に金色の指輪が落ちているのに気づいた——妻の結婚指輪であった。

椀が床に落ちた。唇からは何の声も出なかった。獣は嘲笑いながら、浅野川を越えて夜の闇へと逃げ去った。

二　変容のはじまり

老人は三日三晩、本多の森の小屋の中でひと言も発せずに座り続けた。

四日目の朝、彼は立ち上がった。小川の冷たい水で身を清め、白い衣をまとった——死者に着せる衣装であった——そして長く緩やかに湾曲した、研ぎ澄まされた刀を腰に佩いた。

その姿を見た周囲の者たちは震え上がった。彼の目は虚ろになり、歩みの音は聞こえなかった。彼が踏む草さえも、揺れることがなかった。

「あの老人は気が触れたのだ」と人々は囁いた。しかし古い因習を知る年寄りたちは、憂い顔で首を振り、こう言った。「いや、違う。あの方はもっと恐ろしいものを見つけなされた——己の真の名を」

三　追跡

森の獣は浅野川を渡り、卯辰山の奥深くへと逃げ込んだ。古木たちが立ち並び、夜になれば怪異が蠢くと言われる場所へ。しかしどこへ逃れようとも、老人は追った。

最初の遭遇で、獣は老人を嘲ろうとした。山の崖の上に立って叫んだ。「愚か者の老いぼれめ！わしを捕まえることなどできぬ！見よ、どれほど遠く離れているか！」

しかし振り返ると、老人はすでにその背後に立っていた。無音のまま、まるで影そのものを歩いてきたかのように。

——鏡水の歩法——と樹々が囁いた。山の霊気が古の魔法を覚えているから。

獣は跳び、また逃げた。しかし卯辰山の竹林や木々の中をどこへ駆けても、闇の間に老人の影が二つ、次いで三つと現れた——すべて同じ姿、すべて沈黙し、すべて近づいてくる。

——霧の分身——と風がざわめいた。

四　変化

追跡が日を重ねるにつれ、老人の身が変わり始めた。肌はより白く、指はより長くなった。日が頂点に立つ正午でさえ、影は不定形に膨れ上がった。

山で彼に出くわした木こりは、後日ひどく怯えながらこう誓った。「額から角が生えているのを見ました——磨いた黒曜石を刻んだような角でした。そしてその目は……この世のものならぬ炎で燃えていた」

森の獣は己の罪の大きさを悟り始めた。単なる老人を騙したのではなかった——太古の、危険なる何かを目覚めさせてしまったのだ。世界と世界の狭間を渡り歩くもの、人でも霊でも鬼でもなく、その中間の何か。人の形をした鬼（オニ）を。

五　地獄の裂け目の決着

追跡はついに、卯辰山の最奥にある「地獄の裂け目」へと至った——大地の深い割れ目で、人の記憶が始まって以来、禍々しい妖気と熱気を噴き上げ続けている禁忌の場所だった。誰もがこの地を避けていた。

森の獣は裂け目の縁に立ち、もはや逃げ場はなかった。老人が虚空から現れた。白い衣はもはや汚れ、引き裂かれ、額の角は完全にあらわになり、目は赤々と燃えていた。

「お慈悲を！」と獣は叫んだ。「悔い改めます！わしは——」

しかし老人は一言も発しなかった。ここへ至るまでの道すがら、彼は人としての部分を少しずつ影の中に置き去りにしてきたのだ。今や獣の前に立つものは、復讐そのもの——肉体と憤怒をまとっていた。

最後の絶望的な跳躍で、森の獣は老人に組みついた。二者は縁から落ちた——暗く赤く輝く、卯辰山の地獄の裂け目へと。

獣は叫んだ。有史以来すべての断罪された者が叫んできたように叫んだ——金沢の街の向こうまで響き渡るほどの、鋭く貫く声で。

しかし老人は黙っていた。落ちながらも、奈落の炎が二者を飲み込む中でも、唇からは何の声も出なかった。その目は獣に据えられたまま、地獄の炎よりも熱い憎しみとともに燃え続けていた。

六　その後

後日、人々は卯辰山の地獄の裂け目の縁に、あの湾曲した刀を見つけた。他のすべてが燃え落ちているにもかかわらず、刃は傷ひとつなかった。誰もそれに触れようとはしなかった。

ひっそりと石碑が建てられ、こう刻まれた。

『ここに、沈黙の異人の追跡は終わりぬ。いかなる生き物も、二度とかかる怒りを目覚めさせることなかれ』

そして霧が特に深く金沢の街に垂れ込める夜には、今も語り伝える。本多の森から消えた老人の物語を。人と鬼の境を越えた何かの物語を。

人々は常に同じ言葉で締めくくる——

「かくして二者は地獄の裂け目に消えた。永遠に燃え続ける炎に飲み込まれて。

獣は叫んだ。老人は叫ばなかった。

なぜなら復讐に声はない——ただ死よりも深い静寂があるのみだから」

死志录

幕